

東洋學藝雜誌第五號

明治十五年二月十日發兌

○自然淘汰法及ヒ之ヲ人類ニ及ボシテハ如何ヲ論ス
余ハコヽニ自然淘汰法ヲ精細ニ說明セント欲シタレドモ
少シク思考スルトコロアルヲ以テ今ハ只々其大畧而已ヲ
說明シヨリテ以テ更ラニ論スル所アラントス

余ハ前號ニ於テ有機物(人類亦此ノ中ニアリ)増加ノ比例
ハ度學連數ニテ増加スルノ理ヲ說明シ次テ人爲淘汰法ヲ
說明スルニ至リ曰ク凡ソ人類動植物ヲ培養スルニ當テ夥
多ノ動植物中ヨリ最モ優等ナルモノヲ撰ミ培育ス云々ト
今一疑問ヲ起シテ曰ハン天モ亦人類ノ有スルガ如キ撰拔
力ヲ有スルヤ否ヤト

ダーウソ氏此ノ疑問ニ答テ曰ク然リ天ハ人類ノ如キ撰
拔力ヲ有スト而シテ之ヲ自然淘汰ト稱シ且ツ自然淘汰ノ成
立シ得ベキ數種ノ情狀ヲ陳述セリ此ノ情狀タルヤ實ニ錯
雜ナリト雖モコレヲ單純ニ分類スレバ左ノ如シ

第一 氣候即チ空氣或ハ水ノ溫度、一週年中時氣ノ極寒
或ハ極熱、時期推移スルニ隨テ日光ノ分量或ハ強弱、晴天
或ハ雨天ノ日數、氷或ハ雪ノ分量、風ノ指向或ハ強弱、空氣

ノ壓力或ハ電氣狀態地質、海面土地ノ高低等ヲ言フ

第二 位置例ヘハ虎獅豹等ノ位置ハ深林中、魚類ノ位置
ハ河中、鱈鯨等ハ洋中、蛇蛙等ハ穴、鱒魚ハ泥水中ニアル如
キ即チ是レナリ

第三 食物即チ動植物ノ因テ以テ生命ヲ保續スル所ノ食
物ノ全額ヲ云フ

第四 有機體ノ情狀即チ同時ニ生活スル所ノ數百萬ノ動
植物ノ性癖、習慣等ヲ云フ而シテ此ノ諸動植物中ニハ又
左ノ類別アリ

- (一) 敵者
 - (イ) 直接ノ敵者
 - (ロ) 間接ノ敵者
- (二) 助者
 - (イ) 直接ノ助者
 - (ロ) 間接ノ助者

此ノ理由ヨリシテ有機物増加ノ制限セラルヽヤ粗明ナリ
例ヘハ蚊蝶及鳥類等ノ大風ニ遭テ爲ニ吹キ拂ハレ死スル
モノ幾多アラン又幾多ノ有機物同時ニ同位置ヲ求ムルト
キ弱ハ強ノ爲ニ壓倒セラレテ死スルモノ多カルベシ又時
トノハ暴風雨或ハ大旱ニテ飢饉起リ食物ノ不足ヲ生スル
コアラシ又他方ニ於テハ諸有機物中或ハ敵ヲ避ケント欲
シ或ハ餌食ヲ求メント欲スルモノアリテ至ル所トシテ競

爭セサルハナシ

コレニ由テ之ヲ觀レハ有機物中一トシテ競争セサルモノ
ナシ然ラハ則チ此ノ競争ヨリ生スル所ノ結局ハ果シテ何
ヅヤ

夫レ有機物中時氣ニ耐ヘ敵ヲ仆シ食物住居ヲ得テ其體ヲ
安全ナラシムルヲ得ルモノハ即チ榮ヘ能ハサルモノハ
即チ衰フ而シテ今榮ヘ得ベキモノハ強雄且ツ狡黠ナルモノ
ニノ即チ生存ニ適シ天ノ愛ヲ受ケテ撰拔セラレシモノナ
リ其衰フルモノハ即チ微弱ニシテ生存ニ適セス天ノ愛ヲ
受ケザルモノトス

グレグ氏言ヘルコアリ曰ク地球上何レノ時何レノ處ヲ問
ハス有機物ハ生存ノ爲メ常ニ苛酷ナル競争ヲ爲スナリ然
スレハ此諸有機體盡ク生存ヲ得ザルガ故ニ弱即チ生存ニ
不適ナルモノハ凋衰若シクハ枯死シ強即チ適スルモノハ
生存ヲ堅フシテ増加スルヲ得ルナリ

動物中能ク身邊ノ状態ニ適スル者ハ其適セザルモノヨリ
時々日々ニ得ル所ノ利益多シ例ヘハ同類中ノ弱者即チ適
セザルモノ死スル際ニ強者即チ適セル者ハ生存シ弱者ノ

凋衰スル際ニ強者ハ能ク榮ヘ且ツ弱者ノ死スベキ地ニ處
シテモ能ク之ニ耐ユルヲ得ルナリ之ヲ要スルニ動物中最モ
剛健敏捷若クハ最モ暴烈ナルモノ即チ最モ剛活動力ヲ有
スルモノハ最モ長命ヲ保チ最モ泰カニ生活スルヲ得且ツ
競争者ヲ壓倒シテ繁殖スルヲ得ルナリ而シテ疾アルモノ若
クハ愚昧微弱ナルモノハ生存スル能ハザルナリ

(以下次號)

○分子ノ解

磯野徳三郎

化學ハ土壤空氣及水ヲ構造スル物質ノ性質及變化ヲ研究
スルノ理學ナレハ凡ソ人間ノ五感ニ觸ルモノ皆此ノ大ナ
ル藩圍中ニ含有スルナリ故ニ人間物質上ノ幸福即チ衣食
住ノ改良ヲ増進スルハ全ク化學ノ功力ニ依ルト云フモ蓋
シ過言ニアラサルヘシ

此至要ナル理學ノ基礎ハ伊多利ノ學士アメデオ・アウガ
ドロカ始メテ千八百十一年ニ發言シ後チ四年ヲ經テ佛國
ノ學士アムペールカ再言セシ所ノ通理ナリ其言ニ云ク
氣體トナル諸物質ノ同容ハ同シ景況ニ於ケルキニハ必
ス同數ノ分子ヲ含ムト

左ノハ此通理中ノ分子トハ如何ナル義カ之ヲ説明スルハ
則チ余カ目的トスル所ナリ

夫ノ諸科ノ理學ニ於テハ其主トナル所ノ事實ト事實ヲ説
明シテ理學的ノ體裁ニ之ヲ秩序スルノ理論トヲ區別セサ
ルヘカラス唯事實ノミ眞誠ノ智識ニシテ千古變セサルモ
ノト看倣スヘク而シテ理論ハ唯眞理ニ向テ臆測スルニ過
サルヲ以テ常ニ變化スルモノナリ此區別ヤ實ニ單一ナル
モノナリト雖世ノ論者往々之ヲ混淆シ著書論辨等ヲシテ
諺ニ云フ水掛論トナスト頗ル多カラシム然レモ理學ノ進
歩セシ歴史ヲ檢セハ直ニ明瞭ナル境界ノ眼前ニ現出スル
ヲ見ノ看ヨリ理學中主眼トスルノ事實ハ更ニ變化スルトナ
シト雖モ其理論或ハ體裁ニ至テハ數々動搖改革スルヲ三
千年前シヤルギヤ人カ觀察セシキヨリシテ惑星ノ運行ニ
變化セシコアリシカ然レモ其運行ヲ説明スルノ理論ハ時
ト共ニ變シ遂ニニュトン及ラプラースカ普通重力ノ通理
ヲ案シテ之ヲ説明スルノ今ニ至レリ而シテ其通理ハ如何
ニ高尚ナルモ如何ニ吾人カ之ヲ信スルノ深キモ以テ星學
上最後ノ結果トナスヘカラサルナリ然ラハ人間ハ果シテ

眞理ノ淨土ニ達シ得ヘカラサルカ將タ得ヘキカ余説アリ
他日ヲ俟テコレヲ論セン

此問題ニ付猶一ノ注目スヘキコアリ凡テ理學ノ高上ナル
通理ハ以前ヨリ充分ニ豫想セラレタルモノナリコパルニ
カスノ天體論モ已ニピサゴラスノ教課中ニアリシヲ見ル
重力ノ法則モニュトンカ彼ノプリンシビヤヲ發兌セシ數
年前ニフック及カセニ論スル所ナリキ去レハ理學ノ歴
史ヲ觀察シ來ラハ正ニ理學ノ一朝一夕ニ發達スルモノニ
アラヌシテ其根ヲ張り枝ヲ長セシムルニハ數十年間ノ用
意ヲ要スルヲ覺ルヘシピサゴラス及フックノ豫想カ其時
ニ繁茂セサリシハ其種子ノ塔田ニ落チシ故ナリ然シナカ
ラ時來レハ種子忽チ芽ヲ出シ根ヲ生スルニ至ラン例之ハ
ニュトンヲシテ世ニ出サラシムルモ千七百年紀ノ終ニハ
必ス重力ノ法則ノ發明ヲ見シナルヘク又ニュトンヲシテ
ガリレオ及ケプラーノ前ニ生セシメハ必ス自ラ説明セシ
至難ノ問題ヲ解シ能ハサリシナルヘシ吾人ハ公平ノ眼ヲ
以テ大儒碩學カ理學史中ニ現レ其美名ハ其實蹟ニ反セス
吾地球上ノ冥霧ヲ排シ眞理ヲ探ルノ功業ヲ嘆美スルモ亦

稀有ノ大學士ト雖從來貯藏シ來レル眞理ノ資本ヲ増加セ
ルハ僅ニ微々タルモノナルニ駭カサルヲ得ス理學ノ成長
スルヤ夫レ斯ノ如ク遅々タリ而シテ人ノ其田ヲ耘耨スル
ハ實ニ必要ナルヲナレトモ其進歩ヤ決シテ一人一個ノ力ニ
ハ依ラサルモノナリ最モ幽玄ナル通理モ時來ラサレハ實
ノラス時來レハ忽チ成熟ス天地ノ通法ヲ發見スルヲモ又
天地ノ通法ニ從ハサルヲ得ス理學ノ成長スルヤ夫レ斯ノ
如ク遅々タリ故ニ其造構ヤ堅牢ナリ其進歩ヤ着實ナリ一
變スレハ一步眞理ニ近ツキ再變ノ二步眞理ニ近ツキ序ヲ
踏ミ順ヲ逐フテ始メテ眞如ノ月ヲ看ルヘシ化學亦斯ノ如
キ變遷ヲ經テ今ノ在様トハナレリ而シテ其基礎トスル所
ハ則チアウ^ガガドロノ通法ナリ此通法ヤ早ク理學ノ歴史
上ニ現出シタレトモ時來ラスシテ約ソ五十年ノ間地中ニ埋
沒セリ現今ニ至リ始メテ化學界ニ最要ノ地ヲ占ルヲ猶重
力ノ通理ノ星學ニ於ケルカ如シ
却說彼通理中ニ云フ所ノ分子トハ何ソヤ
分子トハ英ニテモレキ^{ット}ルト云ヒ拉丁語ヨリ來レリ蓋
シ原ト實質ノ小塊ト云フ意ナリアムペールノパーチクル

ト云ヒシモ同義ナリ現今ノ理學ニテハ分子ヲ化學的性質
ヲ變スルヲナキ理學的方法ヲ以テ分析シ得ル物質ノ最小
塊或ハ物質カ自ラ存シ得ル所ノ最小分ト說ケリ「試ニ最
モ普通ナル水ヲ以テ之ヲ説明セン水ヲ煮沸スレハ變シテ
蒸氣トナリ千八百倍膨脹ス再言スレハ一合ノ水ハ一石八
斗ノ蒸氣ヲ生ス今此變化ヲ説明セント欲セハ二様ノ想像
ヲナシ得ヘシ(第一)水ノ實質一石八斗ノ間ニ撒布シテ全
ク之ニ充滿シ生スル所ノ蒸氣厚薄淡濃ナク空間ノ最微部
ト雖モ適應ナル水ノ比例ヲ含マサルヲナシ(第二)水ノ一
合ハ一定ノ粒子若干ヨリ成レリ而シテ之ヲ煮沸スルモ更
ニ小分スルヲナク蒸氣ニ變シ一石八斗トナルモ又一合ノ
水ト同數ノ同粒ヲ含メリ其形狀ノ變化スルハ唯粒子相互
ノ距離相遠サカルノミナレハ蒸氣ハ眞ニ厚薄淡濃ナキモ
ノニアラス若シ眼看ルヲ得ハ分子ヲ含メル處ト含マサ
ル處ヲ分別シ得ヘシ乃チ今想像セル水ノ小粒ハアウ^ガ
ドロノ所謂分子ナルモノナリ此二様ノ想像中孰レヲ以テ
是トセンカ乃チ之ヲ證定セン今活栓ヲ備フル玻璃壺ヲ取
リ之ニ若干ノ水ヲ投シ熱湯中ニ置カハ忽チ蒸發シテ其中

ニ充滿スヘシ若シ壘中ノ空間盡ク水ノ實質ヲ以テ充塞セラル、モノト看做サハ(第一ノ想像ノ如ク)同時ニ他ノ蒸氣ヲ壓入スルヲ能ハサルヤ明瞭ナラン然ルニ蒸氣ハ逃去ラサルモ自在ニ他液ヲ注加スルヲ得ヘキ活栓ヲ轉シアルカホールヲ投シテ之ヲ熱センニハ恰モ水蒸氣ノ存セサルカ如ク該液忽チ蒸散ス又更ニイ―サルヲ投センニ恰モ水及酒精ノ蒸氣ナキカ如ク是亦壘内ニ蒸散スヘシ斯クシテ漸次無數ノ液ヲ注加スルニ更ニ前ト異ナルヲナシ之ヲ説明センニハ唯分子ト云ヘルヲ假定スルノ外他ナシ即チ液ノ蒸發スルヤ其分子遠ク相去リ其間隙ニ無數ナル他液ノ分子ヲ容レ得ルナリト

マタ他ノ事實ヲ擧ケテ之ヲ説明センニ水、酒精、イ―サルノ三液ハ他ノ物質ノ如ク共ニ熱ニテ膨脹スルモノナリ而シテ其液體トナレル間ハ膨脹スルノ度各異ナリト雖蒸氣ト變セシ後ハ其度皆同一ナリ若シ液體トナレルキモ蒸氣ト變セシキモ全ク空間ヲ充塞スルモノト看做サハ何故ニ膨脹ノ度前ニ異ナリテ後ニ同シキヤ毫モ解スルヲ能ハサルヘシ然レモ若シ物質ハ一定ノ小粒即チ分子ヨリ成ル

モノニシテ液體ヲ成スキハ互ニ近接セルモ蒸散セルキハ遙ニ相距ルニ至ルト看做スキハ則チ分子相互ノ作用液體ノキニハ甚シキモ膨脹スルニ從フテ凝聚力次第ニ減却シ其蒸散スルニ當テハ終ニ消滅スルニ至レハ分子各孤立シテ異質ノモノト雖モ恰モ同物ノ如ク隨テ熱ノ作用モ亦同一ナルヤ明瞭ナラン

其他分子存在スルノ證據頗ル多シ就中二條ノ注意スルニ足ルヘキモノアリ

玻璃ニ於テハ細微ノ間隙ヲモ見出スヲ能ハスト雖モ光線ナルモノアリ能ク之ヲ通過ス勿論光線ナルモノニ就テハ現今ニ至ルマテ未タ充分ノ智識ヲ得ルヲ能ハスト雖モ頗ル信據スヘキ所ノ波傳論アリ今此論ニ從ヒイ―サルノ波アリトスルモ又之ヲ信セスシテ無シトスルモ七種ノ光線各一定ノ大サヲ有スルモノナリ例之ハ赤光ノ波ノ長サハ一インチノ三萬九千分の一ニシテ紫光ハ五萬七千分の一トス星學上ニテ論スレハ各光線皆同一ノ速力ヲ有ス然レモ玻璃中ニ來ルキハ管ニ其速力ノ減スルノミナラス各光線忽チ其速力ヲ異ニシ從フテ屈曲スルノ度相異ナルニ至

ル若シ玻璃ノ質ヲシテ毫モ厚薄ナカラシメハ更ニ之ヲ説明シ之ヲ想念スルヲ能ハサルヘシ唯玻璃ニモ間隙アリテ獨リ光線ノミ之ヲ探知スルト臆測スルノ外他ナシ此關係ヨリシテ分子ノ大サヲ計算セシニ約ソ一インチノ五十億分ノ一ヨリ小ナラント云フ

彼ノ石鹼球ヲ吹クニ讀者ノ知ル如ク皮膚ノ薄サ若干度ニ至レハ終ニ破裂シテ此點ヨリ薄キ球ヲ吹クヲ能ハス而シテ理學者カ其極度ニ達セルキノ皮膚ノ厚サヲ測リシニ赤光ノ波ノ長サノ四分一即チ一インチノ十五萬六千分ノ一ナリト今此ヨリ以上吹展スヲ能ハサルハ何ソヤ理論上ヨリ云ハソニ若シ水ノ物質ヲシテ全ク厚薄ナカラシメハ則チ之ヲ無限ニ吹展スヲ出來サルノ理ナカラシ然レモ若シ水ヲシテ分子ヨリ成ラシメハ則チ膜ノ厚サ分子ノ直徑ニ達スルヲ以テ限リトナスヤ明瞭ナリ而シテ分子間ノ距離ヲ大ニシ隨フテ水ノ容量ヲ増加シテ之ヨリ以上ニ吹展スヲ能ハサルハ勿論ナラシ蓋シ石鹼球ノ破ルヘキハ個様ノ限リニ達セルノ明證アリ若シ分子間ノ距離ヲ大ニセント欲セハ之ヲ蒸氣トナスノ外能ハス之ヲ爲ス唯一ノ法ハ熱

ノ力ニ依ルノミ水ノ分子ヲ分離スルニ要スル熱ハ正ニ八十二萬二千六百斤ノ重サヲ一尺擧ルニ要スル力ト同シ實ニ浩大ナリト云フヘシ然ルニ毛細管引力ノ通法ニ據リ且ツ實驗上ヨリモ水膜ヲ展張スルノ力ヲ計算スルニ實驗上理論上共ニ符合ス而シテ試驗ハ膜ノ薄サ十五萬六千分ノ一インチニ至レハ止ルト雖モ猶理論上ノ計算ニ溯リイ

チノ五十億分ノ一ニ達セルノキノ力ヲ測ルニ恰モ水ノ分子ヲ分離シテ蒸氣トナスニ要スル力ト同一ナリ

其他同シ限界即チ一インチノ五十億分ノ一ナルヲ證スル理學的現象數多アレハ決シテ偶然ニ出タルモノニアラサルヤ必セリウ^井ルリヤ、ムタムソソノ計算ニ據レハ二十五億分ノ一ト五十億分ノ一トノ間ニアツテ若シ豆大ノ水ヲ地球大ニ見ルヲ得ハ其造構ノ粗笨ナル小鉛彈ノ堆ヨリ甚ダシフシテ手毬ノ堆ヨリモ細ナルヘシ而シテ氣體一インチ立方中ノ分子ノ數ハ百萬々々即チ十ノ二十三乗^{10²³}ナリト

以上説クカ如クナレハ讀者須ク知ルヘシ分子ノ思想ト云ヘルハ理學者ノ腦裏ニ於テハ甚ダ確實ナルヲ分子ハ既ニ

形而上ノコニアラス恰モ理學者カ惑星ヲ論スルト同一ナ
 リ理學者ノ分子ハ物質ノ一定ナル小塊ナリ縱令ヒ至微ナ
 リト雖トモ之ヲ測量スヘシ之ニ於テ諸力ノ作用ヲ檢スヘ
 シ吾人ハ其性質及關係ニ付キ確實ナル智識ヲ有セリ千七
 百年紀ノ論戰ヲ起シタル無限分性說ノ如キ形而上ノ問題
 ト現今ノ概念トハ更ニ關係ナキナリ星學者ノ定位ハ惑星
 ナリ理學者ノ定位ハ分子ナリ地質學者ハ地球ヲ解剖シ化
 學者ハ分子ヲ分析スタムソソ曰ク分子ハ形狀アリ運動ア
 リ作用ノ通則アリ其大サ測量シ得ヘキ物質ノ小塊ニシテ
 理學的研究ニハ通明ナル題目ナリト

○未開ノ遺俗果テ何レノ所ニ滞在スルヤ

松下 丈吉

諺ニ曰ク燈臺モト暗シト蓋シ人ノ常ニ他ニ明ニシテ自ラ
 暗キニ比スルナリ夫レ開化ノ社會ニ棲息シテ自由ノ空氣
 ヲ吸ヒ智識ノ恩澤ニ浴スルモノハ野蠻ノ風俗ヲ聞テ皆ナ
 驚愕セサルハナシ然レトモ自ラ住居スル所ノ社會ニ於テ
 其俗ノ尙ホ今日マテ滞在スルモノアリトハ夢ニモ之ヲ知
 ラサルナリ

サレハ今北亞墨利加マツケンジ—河西ノ「エスケモ—」ハ
 兩類ニ小孔ヲ鑿ツテ石ノボタンヲ着ケ中央亞非利加ノ
 「ボルノオース」族ハ顔面ニ四十一個ノ刀瘢ヲナシテ之ヲ
 飾リ又々手足ニ於テ共ニ二十四ヶ所、胸部ニ於テ八ヶ所
 及ヒ腰部ニ於テ各々九ヶ所ヲ切テ之カ身體ヲ裝ヒ即チ總
 計九十一ヶ所ノ刀瘢ヲ爲セリト聞カハ世人皆ナ驚キテ止
 マサルヘシ實ニ其瘡痍ノ多キハ我カ切レ與三郎モ亦タ一
 歩ヲ讓ラサルヲ得ス然レトモ是等ノ俗西洋ニ於テハ耳環
 トナリ日本ニ於テハ刺繡ト爲リテ今日ニ躊躇シ未タ全ク
 之ヲ掃フコ能ハサルナリ

聞ク東印度ノ「コンド」族中ニ在テ新ニ婚姻ヲナス者ハ其
 新婦ヲ紅ノ風呂敷ニ裹ミテ自ラ之ヲ負擔シ而シテ二十或
 ハ三十人ノ同輩ヲ從ヘ其新婦ノ朋友ヨリ受クル所ノ激烈
 ナル攻撃ノ衝ニ當ラシム其間或ハ石ヲ投シ竹ヲ擲チ恰モ
 新婦ヲ取戻サント欲スルノ狀ヲ爲シテ之カ禮トナスト是
 ノ實ニ奇異ノ俗ナラスヤ然レトモ余老嫗ノ言ニ聞クニ德
 川ノ末政マテ東京ニ於テモ貴顯ノ家ニハ往々新夫ヲ祝ス
 ルニ石ヲ投スルノ事アリキト余カ故郷(筑後)ニ於テ尙ホ

今日マテ新夫ニ水ヲ掛クルノ俗アルヲ見レハ此言決シテ
虚言ニ非ラサル可シ

夫レ現今ノ如ク過半舊習ヲ墨守シ剩ヘ古代ノ事物ヲ貴重

シテ其便否ノ如何ヲ問ハス事々物々舊ヲ戀フノ社會ニ在

テ舊俗ノ所在ヲ探ルハ甚タ難キカ如シト雖モ舊習ヲ守ル

ノ法ニ於テ亦タ自カラ二個ノ區別ナキニ非ラヌ一ハ用意

シテ之ヲ守ルモノ又ターハ知ラス識ラス之ヲ守ル者是レ

ナリ例之ハ古來英雄ノ如キハ固ヨリ人ノ意表ニ出ツルヲ

旨トスルモノナレハ新奇競争ノ際ニ當ツテハ或ハ舊俗ヲ

固守スル者モ尠カラズ將タ又タ文人雅客モ之ニ同シ只

管古代質朴ノ有様ヲ戀フノ餘リマタ其事物ヲ保存シテ之

ヲ表スル者多シ故ニ是等ニ就テハ純然タル舊俗ノ宿所ヲ

求ム可ラサルナリ然ラハ則チ舊俗ノ滞在スル所果テ那邊

ニ在ル乎

第一愚人童蒙ノ間ニ在リ此レ今日頑固ト愚昧トヲ同意義

ニ混シ用フルモノアルヲ見テ之ヲ知ルヘシ頑固トハ何ノ

謂ソヤ舊習ヲ固守スルノ謂ニアラスヤ今マ一例ヲ舉ケテ

之ヲ云ヘハ彼ノ放蕩ナル裏店連ニシテ今日マテ斷髮ノ便

ヲ知ラス猶ホ依然トシテ結髮ノ舊俗ニ安スンナル者アリ
其他老人女子ノ歲時ヲ嚴ニシ神佛ヲ尊信スルノ深キヲ見
テ之ヲ知ルヘシ

彼ノ童子ノ嬉戯中カクレンボ捉迷藏、オニゲッコ捉遁走、ノ如キハ野蠻婚姻ノ禮

ヨリ變化シ來リタルモノナル可シ今一二ノ例ヲ掲クレハ

ブーリアン氏カマアレ——鳥野蠻族ノ記ニ曰ク衆人相集リ

總テ用意整フタルトキ新夫婦ハ其族中ノ一個ノ老人ニ伴

ハレ豫メ結納者ノ強弱ニ隨ヒ多少其大サヲ異ニセル圓隊

ノアル所ニ至ル是ニ於テ新婦先ツ之ヲ回走シ而シテ男子

ハ一步ヲ後レテ之ヲ逐フ若シ果テ之ヲ捉フルコトヲ得ハ其

妻ト爲シ否ラサレハ妻ト爲スコトヲ得スト又タシベリヤ

「カルマツク」族ハ其祝日ニ至リテ夫婦共ニ馬ニ乘シ而シ

テ其婦人ヲ逐フテ之ヲ捉フルノ禮ヲ存ス其他祝日ニ至ツ

テ新婦初メニ山ニ隱レ而シテ新夫ハ一二時ヲ經テ之ガ跡

ヲ探リ果テ之ヲ見出スコトヲ得ルト得サルトニ因ツテ或ハ

妻ト爲シ或ハ妻ト爲スコト克ハサルノ例ハ野蠻族中甚タ珍

ラシキニ非ラス是ニ依テ之ヲ觀レハ余輩カ童蒙ノ間ニ舊

俗ヲ存スト云フモノ亦タ必シモ誣言ニ非ラサルナリ

第二情緒發動ノ場所ニ在リ夫レ智ト情トハ常ニ反對ノモノニテ智力愈々強盛ナレハ欲情隨テ其勢ヲ減シ欲情愈々激烈スレハ智力隨テ其働ヲ減ス、サレバ如何ナル智者ト雖モ喜怒發動ノ際ニ當ツテハ亦一愚人タルヲ免レヌ故ニ余輩カ舊俗ハ情緒發動ノ場所ニ在リト云フモノハ敢テ一定ノ人ヲ指示スルニ非ラス總テ喜怒哀樂ノ際ニ處ルモノハ知ラス識ラス舊俗ヲ保存スルノ傾向アルヲ云フナリ

余輩ハ遊興ノ場所ニ於テソノ舊俗ノ保存スルモノ多キヲ見テ常ニ驚愕セサルハナシ以爲ラシ必スヤ之カ原因アラント友ニ質シ書ニ探リ之ヲ案スルヲ久シ然レトモ未タ以テ一説ノ充分ニ之ヲ明解スル者アルヲ聞カス今情緒發動ノ説或ハ以テ之ヲ説明スルニ足ラン歟サテ世ニ藝人ヲ稱シテ何某丈ト云ヒ或ハ番附ニ一種ノ文字ヲ用フルカ如キ其一例ナリ且ツ尙今日ニ至ルマテ藝妓ハソノ時ヲ計ルニ必ス線香ヲ用ヒ而シテ其席ニ上ルヤ必ス亦タ祝儀ヲ歌フ聞ク妓樓ニ於テモ風俗ノ笑フ可キモノ甚タ多シト其他一々枚舉ニ違アラスト雖モ今唯タ魯文子ノ説ヲ引テ藝妓坐付ノ昔日未開ノ風俗ヨリ變化シ來リタルヲ證セン

其説ニ依レハ芳原繁盛ノ始メニ於テハ未タ藝妓ナル者アルナシ依テ富有ノ徒ハ往々近隣ノ常磐津或ハ清元ノ師匠ヲ招キ其徒然ヲ慰メタリキ然ルニ未開ノ習ヒニテ娼妓ハ一夜ノ妻ト唱フルモノナレハ其師匠ハ常ニ祝儀ヲ歌ツテ之カ興ヲ添ヘタリ爾後物換リ星移リ終ニ之ヲ職トスル者出テ來リテ今ノ藝妓ニ傳ヘ今日マテ其遺俗ヲ存シテ初メニ祝儀ヲ歌フトハナレリト實ニ如此不潔ノ文ヲ綴ルハ記者モ甚タ愉快ニ非ラスト雖モ素ヨリ未開ノ風俗ヲ以テ本論ノ旨趣ト爲シタレハ間々或ハ汚穢ノ言ヲ交エサルヲ得ス我レ豈ニ辯ヲ好マンヤ已ヲ得サレハナリ

喜ノ場所ニ於テ舊俗ノ保存スルハ前ニ掲ケタル婚姻ノ習慣ニ依テ明ニ之ヲ証スベシ其儀式ノ繁雜ニシテ甚タ笑フ可キモノ、多キハ之カ實際ヲ目撃シタル者ノ能ク知レル所ナリ余カ舊里ニ於テハ新婦ノ初メテ良人ノ門ニ入ルヤ竊ニ鍋蓋ヲ以テ之カ頭ヲ蔽フノ例アリ又タ印度ノ「チッペラ」族ハ其婚姻ノ禮トシテ新婦ハ或ル飲料ヲ整ヘテ良人ノ膝ニ持レ先ツ自ラ其半ヲ飲ミ而シテ其餘ヲ良人ニ飲マシムトカ聞ケハ我邦ノ所謂三三九度ノ盃ハ如キ或ハ是

之ヲ云ハハ彼ノ放蕩ナル裏店連ニシテ今日マテ鬪鬪ノ便

俗ヲ存スト云フモノ亦タ必シモ誣言ニ非ラサルナリ

等ノ俗ヨリ直ニ變化シ來リタルモノナランカ其他祝事ニ
神佛ヲ祭ルカ如キ皆ナ喜ト舊俗ト同伴スルノ證據ニ非ラ
サルハナシ

今翻テ哀傷ノ域ニ入りテ之ヲ求ムルニ前者ニ比スレハ更
ニ甚シキモノアリ試ニ一患者ノ家ニ就テ之ヲ觀察セヨ誠
ニ絶倒ニ堪ヘサルモノ多カラン或ハ食ヲ斷ツテ之カ回復
ヲ祈ルアリ或ハ易者ニ就テ之カ吉凶ヲ占フアリ或ハ神符
ヲ服セシメ或ハ禁況^{マシナイ}ヲ爲シ其舉動一トシテ古代ノ迷心ニ
基井セサルハナシソノ或ハ不幸ニノ鬼藉ニ上ルヤ實ニ
奇異ナル儀式ニ依テ之ヲ葬ル然レモ舊俗ヲ保存スルモノ
必シモ哀傷ノ極ニ至ルヲ要セズ瑣小ニテモ悲痛ヲ感スル
ノ場合ニ於テハ果テ能ク之ヲ發出スルノ傾向ヲ有ス例之
ハ小兒ノ蹉躓スルヲ見テ其痛所ヲ吹キテ之ヲ醫スルカ如
キハ誠ニ解スヘカラサルコトナリ而シテ此事特リ我邦ニ限
ラズ西洋ニテモ「吸フテ之ヲ治スベシ」ノ語アルヲ見レ
ハ必スヤ廣ク世界ニ傳播シタルノ習ナランカ試ニ二三ノ
例ヲ引テ之カ起源ヲ明ニセン今マ我日本ニ於テ加持祈禱
ト唱ヘ頻リニ患者ヲ吹キテ之ヲ治セント欲スル者アリ此

レソノ起源ヲ探ルノ端緒ニアラスヤ

ラボック氏曰クラプランド人ノ中ニ於テハ若シ其族中病
ルモノアレハ呪詛^{マシナイ}ハ其前額ヲ吸ヒ其顔面ヲ吹キテ之ヲ治

セソコヲ謀ルト南亞非利加ニ於テ亦タ此俗アルハ同氏カ
チアッブマンノ言ヲ引ケルヲ見テ之ヲ知ルベシ又タシベ

リヤ南、北亞墨利加及濠洲ニモ此俗アリト云フ蓋シ野蠻
ノ諸族ハ大概皆ナ疾病ヲ以テ鬼神ノ所爲ト爲スモノナレ

ハ患者ヲ吹キ若クハ之ヲ吸フテソノ惡鬼ヲ出サント欲ス
ルモ誠ニ其處ナリ然ラハ則チ小兒ヲ吹クノ習慣モ亦タコ

ニ起源シタルハ敢テ疑ヲ容レサルナリ
以上思ハスモ長文ニ涉リタリト雖モ之ヲ要スルニ情緒發

動ノ際ニ於テ知ラス識ラス舊俗ヲ保存スルモノハ元來情
緒ノ發動ニ因テ智力ノ不動ヲ惹起シ爲メニ幾分ノ判斷力

ヲ減殺シテ始メテ之カ作用ヲ爲スモノナレハ是レ亦タ舊
俗愚蒙ノ間ニ滞在スト云フモ敢テ妨ナキナリ然リ而テ今

一個ノ全ク之ト相異ナル所ノ方向ニ於テ極メテ舊俗ヲ保
存スルニカアル者アリ曰何ソヤ曰壓制政府即チ是ナリ
西人ノ諺ニ曰ク英人ハ帽ヲ脱メ禮ヲ謝スルニ甚タ慇懃ナ

ラスト蓋シ政治ノ自由ナル所ハ習俗モ亦タ隨テ自由ナル
 ナリ今マ廣ク之ヲ萬國ニ徵スルニ支那ノ如キ魯西亞ノ如
 キ古來壓制ヲ究メタルノ邦ニシテ習俗ノ自由ナルハ未タ
 曾テ之ヲ聞カス之ニ反シテ合衆國ノ如キ初ヨリ自由ヲ以
 テ建國ノ基礎トナシタル邦ニ於テハ其習俗ノ自由ナル或
 ハ當人ノ意表ニ出ツル者多シ嘗テ其獨立ノ際ニ當テ使節
 フランクリンカ白帽ヲ戴キ兼服ヲ着テ佛廷ニ接シ歐洲ノ
 各國ヲ驚カシタルモ亦タ其一例ナリ我日本ニ於テモ維新
 以來人民ノ舊觀ヲ一變シタルハ幾分カ政府ノ改良ニ歸セ
 サルヲ得ス斯クノ如ク壓制政府ト舊俗ト常ニ密接ノ關係
 ヲ有スルモノナルヲハスペンサー氏既ニ其普通進歩論中
 ニ於テ精シク之ヲ論シタルハ更ニ余輩カ言ヲ要セス今其
 要領ヲ拔萃シテ讀者ノ參觀ニ供セン其論ニ曰ク政府、宗
 教、及ヒ風俗ノ三者ハ本ト野蠻ノ酋長ニ濫觴ノ歲月ヲ經
 ルニ隨ツテ漸ク分離シ彼ノ低頭ノ禮ノ如キ素ト酋長ヲ尊
 敬スルノ禮ナリシモ今日ニ至ツテハ廣ク民間ニ傳ハリテ
 人々之ヲ以テ通常ノ禮ト爲スニ至レリ夫レ如此其根元相
 同シキカ故ニ今日ニ至ルマテ政府ト風俗トハ常ニ其消長

ヲ共ニシ改進ノ政府ニハ必ス亦改進ノ習俗アルナリト
 政府ト風俗トノ關係斯ノ如クナルヲ以テ革命黨ハ早クモ
 其利益ヲ知リテ政府ニ抗抵セント欲スルニハ必ス先ツ己
 レカ風俗ヲ改ム維新以前有志者カ兎角異風ノ有様ヲ顯ハ
 シタルハ今マ尙ホ世人ノ記憶ニ存スルナルベシ蓋シ有志
 ノ士ハ大概世俗ニ異ナレル風俗ヲ爲ス者ナリ是レ政府ト
 習俗トハ常ニ密接ノ關係ヲ有スルヲ以テ舊俗ニ抗スルハ
 恰モ政府ニ抗スルカ如ク且ツ直ニ政府ノ勁敵ニ當ルハ寧
 ロ近キ舊俗ニ當ルノ易キヲ知レハナリ
 以上ノ論果テ是ナラハ未開ノ遺俗ハ愚蒙ノ間、情緒發動
 ノ場所及ヒ壓制政府ノ三所ニ滞在スル者ナリ此三所ノ外
 ニ於テモ全ク之ナキニアラスト雖モ多クハ皆ナ此三所ニ
 遺存スル者トス嗚呼今コヽニ掲ケタル諸例ニ依テ之ヲ見
 ルモ未開ノ遺俗ノ今日ニ滞在スルモノ亦尠シト爲サス今
 ニシテ野蠻ノ習俗ヲ笑フモノハ誠ニ偏見タルヲ免レサル
 ナリ

○日本製造論一斑

川田德二郎

易曰履霜望冰至ト凡ソ禍ノ發スルヤ未タ發セサルノ前ニ

其兆アレハ其兆アルノ時ニ於テ預シメ之レヲ防クノ計ヲ
 ナサバールヘカラス其發スルノ日ニ於テ百方力ヲ盡シテコ
 レガ防護ヲ勤ムルモ既ニ已ニ其計畫ノ後ル、モノト謂ツ
 ヘキナリ譬ヘハ地震ノ如キ震動ヲ發スルノ前ニハ必ス先
 ツ地鳴或ハ他ノ前表アリテ震動ノ近キニ來ルヲ表スヘシ
 故ニ之レカ難ヲ避ケント欲スルモノハ宜シク其前表アル
 ノ時ニ思慮ヲ回ラサバールヲ得ス又之レヲ一家屋ニ喩フル
 モ尙ホ然リ夫レ居家ノ弊ルヤ最初ハ垣壁ノ破損柱楹ノ腐
 敗アリテ竟ニ全屋崩頽スルニ至ルヘシ故ニ此レカ維持ヲ
 計ルモノハ皆ナ垣壁若シクハ柱楹ニ些少ナル破損アレハ
 直チニ之ヲ修復ス是レ其計ノ宜シキヲ得タルモノト謂フ
 ヘシ今夫レ社會ノ事ヲ考フルニ一國ノ興ルモ衰フルモ亦
 由テ兆スル處アルカ如シ老泉カ所謂禍之作不作於作之日
 亦必有所由兆ト云ヒシモ蓋シ此意ニ外ナラサルヘシ
 近者世上一般財政困難輸出入不平均ノ議起リ演說ニ討論
 ニ著書ニ新聞ニ衆說絶ヘス是レ或ハ履霜ノ前戒ト謂ツヘ
 キカ未タ堅冰ノ至ラサルノ今日ニ於テ宜シク其計畫ヲナ
 サバールヘカラス於是乎我政府大ニ爰ニ見ルトコロアリ學

士ヲ海外ニ招キ經濟練達ノ士ヲ朝野ニ拔キ其道ヲ講シ其
 術ヲ究メ百方物産繁殖ノ方ニ力ヲ盡シ或ハ海陸運輸ノ便
 ヲ計リテ港河ヲ鑿開シ山險ヲ剷夷シ或ハ製造ヲ蓓蓓セシ
 カ爲メ機械ノ改良ヲ試ミル等餘力ヲ遺サス同時ニ學者論
 士亦之レヲ襄贊シ新聞雜誌亦皆之レヲ唱道シ凡ソ製造ノ
 以テ興サバールヘカラスハ世舉テ須臾モ忽ニスヘカラス
 ルモノト認ムルニ至レリ
 夫レ製造工業也者宛モ一國ノ財產ノ如ク人民之レニ由テ
 其富福ヲ索ムルナリ故ニ製造工業ヲ振作ナスハ取リモ直
 サス人民ノ財產ヲ增益ナスト一般ナリ宜シク今日ニ於テ
 之レヲ切論スルハ未タ其計ノ後レサルモノナルヘシ我邦
 地勢及事物上ノ現況ヲ察スルニ土地豐饒、氣候溫和、陸植
 繁茂、海產夥多ニシテ百般ノ材料ニ富ムノミナラス職工
 ノ賃錢ハ之レヲ他邦ニ比スレハ甚タ廉ニ且往古ヨリ諸品
 ノ製造ニ長スト稱ス左レハ此事ヲ振作シ小ニシテハ人民
 各自ノ資産ヲ増シ大ニシテハ社會ノ財產ヲ增益シ竟ニ本
 邦富昌ヲ外邦ニ競フニ至ルヤ洵ニ期望スヘキナリ
 製造ノ要斯ノ如ク大ナリ然ルニ世ノ人多クハ我邦目下ノ

小利害ニノミ着目シテ其眞理ノ蘊奧ヲ索求竅明スル甚タ罕ナリ是レ今日文運ノ昌代ニ憾ナカラストセサル所以ナリ凡ソ事ヲ究メ物ヲ論スルニ其原因影響ノアル處ヲ正シクセス管ニ目下二三ノ現況ヲ論礎トシテ之ヲ述フルニ於テハ其事固ヨリ直接ナレハ或ハ世俗ノ感覺ヲ興起スル稍々大ナルヘケレモ未タ以テ熟讀翫味スルニ足ラサルナリ余ハ然ルカ故ニ本論ヲ述フルニ方リ勤メテ其原因及關係ノ緻密ナル處ヲ索求セシメテ期セリ然レモ余ヤ未熟隨テ自ラ揣摩ノ論ヲ免レス切ニ翹望スル處ハ更ニ世ノ識者カ高論ヲ辱フシテ自ラ其足ラサルトコロヲ補正スルニアリ

製造ノ説タル千叫萬號之レヲ振興スルノ方一ニシテ足ラスト雖モ至大至重ノ方ト謂フヘキハ則チ政治、道德、教育、事物、及地勢上ノ五大關係ヲ出テサルヘシ余ハ左ニ此五大關係ヲ分析詳解セント欲スルナリ

第一 政治上ノ要件

- (一) 財産保險
- (二) 政府ノ工業ニ干涉スヘカラサルコト

(三) 商業ノ開弘

(四) 統計表編製ノ完備

(五) 賦税ノ適宜

(一) 財産保險 此件ハ工業ヲ振作セル政治上ノ事實中最モ緊要ノ一問題ニシテ吾人カ常ニ切論シテ止マサル處ナリ今假リニ須臾ラク之レヲ無用ト看做シテ財産ニ保險ヲ止ムヘシ凡ソ開明日進ノ時諸事皆チ保祐ヲ求ムルニ際テ少モ之ニ思慮セズ莫大ノ資金ヲ投テ大工業ヲ成サンコト望ムモノアルヤ蓋シ工業ノ進達事物ノ發明ニ弊害ヲ與フル尠ナカラサルヘシ何トナレハ世間一般ニ勤勞、熟練、才識、資本、忍耐ノ五大要件ヲ盡サントスルモ既ニ其功能ヲ表明スルニ危疑アレハ誰レシモ逡巡シテ決行セサルヘシ縱令然ラサルモ此要件ヲ空ジク消費シ了ルノ憂アレハ事業ノ進達大ニ期スヘカラサルナリ是故ニ革命精神ノ鬱勃スル時代ニ於ケルカ或ハ又信任乏シキ政府ニ於テハ財産保險ノ法アルモノナキカ如ク至ク其効驗ヲ逞スヘカラサルヲ以テ尋常直接ノ結果ヲ來タスヘキ工業ニアラサルヨリハ其進達ヲ企望スヘカラサルナリ事體斯ノ如クナレハ

製造ノ要斯ノ如ク大ナリ然ルニ世ノ人多クハ我邦目下ノ

遂ニハ工業ニ熱望スル者若シクハ財産ヲ所有スル人々モ亦險害ヲ懼テ其業ヲ策ルノ精神ヲ他ニ轉スヘキナリ是レ焉ノソ歎セサルヲ得ン余カ特ニ保險ヲ緊要トナスモノハ其意之ヲ勤勞、熟練、才識、資本、忍耐ノ五大要具ト一致セシメテ以テ工業ノ進達ヲ計ルヘシト爲スニ在リ但シ之ヲ實行セシニハ當局者カ工業ニ從事セル人民ノ自由ト獨立トヲ擁護スルヲ其施政ノ正鵠トシ以テ他ノ凌虐ヲ防衛スルヲ猶ホ財産ヲ保護スルカ如クナラントヲ要ス

試ミニ社會ノ全況ヲ觀察スヘシ縱令豐富ノ資本家タルモコトニ完全ノ保護アラサルトキハ決シテ莫大ノ資本ヲ抛テテ工業ニ從事シ公道ノ義務ヲ盡シテ以テ社會ノ盛昌ヲ計ルヘカラサルナリ之レヲ徵センニハ英國ノ史乘ニ就ヒテ其的例ヲ求ムルニ如クモノ莫カルヘシ其今日ニ一般繁盛ノ景況ヲ存シテ少モ衰色ヲ顯サザルノミナラズ陸ニハ遍シク鐵道ノ設ケアリ恰モ蛛網ノ如ク海ニハ數萬ノ漁船アリ汎ク五洲ノ物貨ヲ通シ千業勃興シ萬務盡ク舉レリ今此原因ヲ究索スルニ蓋シ英國ハ其險ノ宜シキヲ得タルニ由レリト思惟スルナリ

(未完)

○非時事小言論

上田秀成 稿

第二章 政權論

權トハ何ソヤ曰力是レナリ然ラハ政權トハ何ヲ云フヤ曰社會ノ安寧ヲ保タシメ爲メ人心ノ結合ヲ堅固ナラシムル力是レナリ集合シテ一體ヲ爲スモノ何物カ力ヲ要セザラン蓋シ社會ハ人民ノ集合體ノミヨク集合ニシテ彼ノ力ナクシテ忽チニシテ其順序ヲ攪亂シ人々安キ思ナキニ至ランコレ此ノ力ハ社會ノ安寧ヲ保持スルニ適スル丈ハ充分ナル勢力ヲ要スル所以ナリ

斯ク政權ノ義ヲ解シ置キ福澤氏ノ時事小言第二編第三編ヲ讀ムニ先ツ第二編ニハ專ラ國會開設ノ事ヲ論セラレタリ主義ノ如何ハ暫ク置キ國會開設ノ事ハ予モコレヲ否トスルモノニ非ス況ンヤ昨年十月十二日ノ聖諭アルニ於テオヤ今更ラ兎ヤ角ト論スルモ無用ノ辯ノミ故ニ此ノ一條ハ放棄シテ第三編ヲ讀ムニ政權ヲ強大ニシテ確乎不拔ノ基ヲ立ルハ政府タルモノハ一大主義ニシテ政體ノ種類ヲ問ハズ獨裁ニテモ立憲ニテモ又或ハ合衆政治ニテモ苟モ此ノ主義ヲ誤ルモノハ一日モ社會ノ安寧ヲ維持スル能ハ

カ、明ナリトテ第二編ニモ多ク此ノ意ヲ論セラレシガ此ノ議ニハ予モ別ニ異議アルコトナシ實ニ社會ノ順序ヲ保ツ爲メニハ壓制ニ類スル處置モ爲サ、ル可カラザルコトアリ是レ實ニ止ムヲ得ザルモノナリ否此ノ社會ノ組織アル間ニアリテハ宜シク然ラサル可カラサル理アルモノナリ乞フコトヲ左ニ論セン

夫レ水ハ液體ナリ然レモ熱ノ作用ニヨリテハ散シテ氣體トナルコトアリ然ルニ水ハ氣體トナルノ性質ヲ有スルモノナレバトテ水ヲ處スルニ氣體ヲ處スル法ヲ以テセハ如何アルヘキ其目的ヲ達スル能ハサルハ三尺ノ童子モコレヲ知ルヘシ社會モ亦然リ人ハ固ト道德ノ動物ナリ遂ニハ至善至樂ノ域ニ至ルコトアルヘシト雖モ今日現ニ恁ル社會ニ棲息スル間ハ決シテ道理ノミヲ行フ事能ハス道德ノ美事ノミ行ハル、コトヲ望ム可カラス然レハコト時ニハ壓制ニ類スル行モナサ、ル可カラサルコトアリ否或ハ場合ニ於テハ真正ナル壓制ノ手段ヲ用ユルコトノ必用ナル時ナシトス可カラス予カ前章ノ終リニ於テ蠻民ノ例ヲ掲ケテ其暴ヲ防クニハ腕力モ亦大切ナルコトヲ論セシモ畢竟ハコレト同

意ノミ唯タ氏カ論トハ目的ニ於テ異ナル所アリテ互ヒニ己ノ目的ニ達セントスルニ際シ適マ政權ト稱スル街上ニ於テ稍同方向ヲ取リタルノミ然レハコト下編ヨリ再ビ反對ノ方向ヲ取ルノ必用ヲ發見セリ否第二第三編中ニモ多少反對ノ意見ナキニアラスト雖モ其大主眼ナル政權ヲ強大ニス可シト云フノ理アルヲ贊スルノミ

氏ガ政權ヲ強大ナラシメンカ爲メニ國會ノ開設ヲ企望スルモノナリト論セラレタルハ予少シク疑ヒナキ能ハス國會果シテ政權ヲ強大ニシ得ルカ古來ノ實例ヲ見ルニ北米合衆國佛國ノ共和政體英國ノ立憲君主政體ノ他ニ幾何ノ例アルカ羅馬カ埃國カ將タ日耳曼カ予ハ適マ反對ノ例多キヲ見ルノミ況ンヤ佛ノ如キハ數十年間非常ナル大混亂ノ後僅ニ今日ノ在様ヲ有ツモノナレハ今日以後ハマタ如何ナル變動ヲ生スルヤハ實ニ測ル可カラサルナリコレ只佛ノミニアラス英ト云ヒ米ト云フモ今日ノ在様ハコレヲ千萬年ニ保續ス可キカ十數年ノ後ニハ大混亂ヲ生ス可キカ今日ハ實ニ明言シ難キモノアルナリ

時勢ノ變轉ハ無量ナリ古昔ノ實例モ後世ノ實檢ニ異ナル

トナシトス可カラス況ンヤ千萬里外ナル歐洲一二ノ事實
 ヲ以テ風土人情全ク異リタル東洋ニ於テ同一ナル功用ヲ
 ナサシメントスルコトナレハ其果シテ違フコトナキヤ否ヲ決
 斷スルハ決シテ容易ノ業ニハアラサルヘシ然レモ人ノ他
 ノ獸類ニ異ナルトコロハ推理ノ能力アリテ未ダ見聞セサ
 ルコトモ測定シテ屢コレカ處置ヲ誤ラサルニアルニアラサ
 ヤ殊ニ學者ノ最モ尊ムヘキハ正シクコノ推理ノ能力ヲ使
 用スルニアルナリ嗚呼氏ヨ氏ハ能クコノ注意スルトコ
 ロアリヤ

斯ク論セハ氏或ハ云ハン予カ國會ヲ開設スル時ハ政權ヲ
 強大ニスルニ足ルトノ論ハ予カ所謂推理ノ能力ニヨリテ
 測定セシモノナリ予ハ正シキ心ニヨリテ正シク事ヲ判シ
 タレハ此ノ事ヤ必ス違フコトナカル可シ予ハ隨分遠大ノコ
 ニ注目シテ能クコレカ用意ヲナシタリ予ハ未ダ予ヲ知ラ
 サルノミト夫レ然リ氏カ此ノ論斷ハ誤リナカルヘシ然レ
 モ予カ意見ニヨレハ國會カ政權ヲ強大ナラシムルヨリハ
 寧ロ施政ノ邪魔物ヲ除クト云フ一事カ政權ヲ強大ナラシ
 ムルニ最モ力アルカト思考セリ畢竟スルニ多數ノ人民カ

眞正ナル道理ヲ解スルニ至ル毎ニ施政ノ邪魔物ヲ除キ隨
 テ政權ヲ強大ニシ國會ノ作用ヲ發揮シ安寧ヲ増シ幸福ヲ
 生ス可シト思考セリ

既ニ述ヘタル如ク政權トハ社會ノ安寧ヲ保タン爲メ人心
 ノ結合ヲ堅固ナラシムル力ナリトシ此ノ力ノ強キヲ願フ
 トセハ政事上ニ働クカト他ノ事物ニ働クカト同物ナルカ
 異物ナルカヲ研究セサル可カラズ夫レ然リコレヲ力ナリ
 トセハ力ニ二種アルコトナシ力ニ二種ナクハ同一種ノモ
 ノトセサルヲ得ス既ニ同一種ノモノトセハ眞正ニ道理ヲ
 解スル力モ政治上ニ働クカモ同一物ナラサルヲ得ス既ニ
 同一物ナリトセハ道理ヲ解スル力カ強大トナルニ隨ヒ政
 權モ亦強大ナラサルヲ得ス實ニ施政ノ邪魔物ハ眞正ニ道
 理ヲ解スル者ノ數ニ比例シテ増減スルモノナリ眞正ニ道
 理ヲ解スルモノハ學者ノ誘掖如何ニヨリ増減アル可シ學
 者ノ任ヤ重キコト如此豈ニ勉メスシテ可ナランヤ

雜錄

○吟行猶太人第一集 罪過

緒言 兩世界の極端

千古不滅の氷を以て氷の面を覆ひたる北冰洋のベリング
 ス、ストロイトと呼ぶ海峡にて新と舊との兩世界と二つ
 に分けし所ある彼首の即ちサイベリヤ這首の北亞米利加
 の最とも空漠たる土地と廻圍めり蚤長月の末つらと晝夜
 平分の候とあれば肌も切る許りある北海嵐と共供に宇宙
 の暗黒とありはては荒涼しき極界の晝の盡き纔に夜ぞ來
 るらん淡雪のそれかあらぬう白銀の鉛色ある空合の纔に
 温氣の含むうと思ふも愚ある日の光り地上に見えつ隠れ
 つして照せば白と白き輪とをし望み盡きさる高原を覆ひ
 し雪と相映しそれさえ淡く見ゆるめり限りの向地と辨か
 さま北の方に色黒き巖の巍峨として聳え立ち凸凹させ
 し海岸の得も云ひかさま在様あり此の海岸の一面に氷の
 岩と化しよりけり浪の恰も劍の山宏大無邊の氷山の其頂
 に青色を帯び雪霧朦々としてこれと覆ひこれぞ此の山の
 端ありとの辨ふべくもあらざりしサイベリヤの一端ある
 ケープ、イーストに雙子山あり山の間の怒濤狂瀾最と
 荒涼しき海の上死せるが如き緑の水高き氷の塊と浮べし

様と見渡り景色は是かンベリングス、ストロイトの實景か
 りと知りぬかし

此の海峡の向ひある土地の亞米利加の一海角ケープ、プ
 リンス、オフ、ウェールスにて花崗石のみ聳えける恁も寂寥
 しき土地あれば固より人の住むべくもあらざり刺せ
 る如くある寒氣の石と震のしめ又樹木とも裂けしむ許り
 地裂れば氷片爲めに雨と降り凜冽たる霜嵐のみ僅に空寂
 たる此の土地に其姿を保つに耐えより閑話休題茲に最と
 も奇しうる事あり其の此のベリングス、ストロイトの兩岸
 なる海角を降り埋めたる雪中に足跡を殘せる緯ありける
 甚麼亞米利加の海岸あるの足跡小にして稍輕し然れば紛
 ふへくもかき一婦人の足跡あり然而この婦人のサイベリ
 ヤを遙に見渡り岩山の尖元たる頂と迎りて急く東西の如
 しきサイベリヤの方あるの足跡稍大にして深きと見れ
 る男あると推知するに難からず此の男の海峡の方と目指
 て來ると見ゆ然れの今この二人の男女の新世界と舊世界
 と二つに分別し海流と相隔て一見すると望むか如く相互
 ひに反對をせし方向より次第々々に進みける猶もこゝに

（四行）猶才人第一集 罪過

奇異ふしぎあるこの男女の二人とも最と恐るへき嵐の最中なかに
 這首こゝや彼首あつこと生立ちし松の小枝の悉く寺苑の十字架の如
 くなるが嵐の爲めに倒れ裂け四方に散亂せる中に木と扱
 き氷塊と打碎き雷の如くに轟ける暴風と物とも思はせし
 て今迄向ひ來りする直線と少時の間も去ることなく進
 めるかり恁凄あつこき所に來りて恁自若あつことして來れる者の此れ
 何等の人からんか

* * * * *

右の像ごまく男兒の靴の裏の七つの釘の形かたと到る所の地に印
 し十字架形と作れるの偶然か天か將た命か滑に冰りたる
 雪の上にての代理石板の其上に黃銅の足と以て印せる像
 く見ゆるの此もまた不審ふしぎとかり冥々めいめいする昏明分の何時
 とも分りぬ夜としかれ積る深雪の猶白き高地と射りて
 暗緑ある姿と天の下に見せしめ蒼き星の此ぞとも慥まことから
 ねと凍えんさる蒼穹の邊に閃くのみ今の艸木も眠りやと
 らん肅々として音もなし此の時海峽の方にあたりて最と
 微かろかる光現はれ始めの月の出でてある空合の如くにして
 稍青色に見えけるが次第に光輝と放ちつゝ遂に赤色と變

じけり恁而四下も亦昏あつこかり今まで皓々たる空界も暗天
 の下にありて殆んど見えぬあるや否奇異ふしぎある幽籟の響あ
 り恰も大鳥の羽振はぶりするが如く或の舞ひ或の飛ぶ音を此の
 音聽えとかりけるの最と恐るへきも害なき獸に類せる浩
 大なる現像の近づく兆と知られさり忽ちにして極地に現
 する美麗ある光即ち北光の閃々ひらひらと輝き出て目とも眩くらさん
 する白色の半輪の地平に現れ來て無數の光線と中心より
 發し山海を照し天と輝りて火焰の如き反射のまゝ空界の
 雪に映して氷山の頂と紫にし兩大陸の黒き巖の爲めに暗
 赤の彩りいろどとあせり此の壯觀ある光輝に逢ひ像の消えし如
 くに光霧の中に隠れしが恁あつこる高緯度の地に於ての珍ら
 しうらねど不思議ある映景の爲めに千尋かそ青海原と隔
 てける北亞米利加のサイベリヤと甚ま近く見ゆる隨まに橋
 とも架し得べく思ひれける信見れば兩岸の海角にの透明
 りする碧空の下に人の姿を現れさり又手サイベリヤの
 海角あるの跪きたる一人の男詮せんを盡し摸樣にて得も云ひ
 難き様とかし亞米利加の方に打向ひ手と延ばしてを居る
 りける又亞米利加の海角にの年まご若く艶麗あてやある婦人の

天と指して詮方盡し男の様に答へざる東西の像し此も唯
 數秒の間にして二人の姿も滅んとする北光の光中に色
 蒼く影の如く朦朧として立ち上りしが次第に濃なる霧の
 爲めに暗黒の中に没し上り嗚呼憊る新舊兩世界の極端を
 る氷中にて斯く出逢ひざる二人の者の何處より來りけ
 ん雲時の間映景にて近接さりと見えし間もかく遂に何
 時までも別れし如き此の二人の者とも抑々何等の人を
 る其のまゝ下回に説明ると讀て詳細知りぬりし

雜報

○去る三十一日午前零時の無風曇天にて晴雨計の三〇、
 一三三英寸にて寒暖計の四十四度半ありしに同時三分
 より俄に二十乃至二十五英里の速力ある南風吹き起り時
 々雨を送り正午に至るまで衰へて午後四時に及びて速力
 の漸く九英里に減じ晴天となり晴雨計も午後二時に二
 九、七九二英寸に達し温度は俄に七十二度の高度に昇り
 上り之れが爲め藏内に在る玻璃及び金属製の諸器械の外
 面に夥しく露を置き恰も水と注ぎさるが如く實に創業以

來第一月中に斯の如き高温度に達せしめ未だ曾て有らざ
 る事なれば明治九年より毎年一月のみの平均最高及び最
 低の温度を示す左の如し

	平均	最高	最低
明治九年一月	三四、八	五九、一	一五、五
同十年同	三七、七	五三、六	二三、三
同十一年同	三六、一	五六、七	一八、三
同十二年同	三七、七	五九、二	二二、一
同十三年同	三六、六	五五、三	二〇、四
同十四年同	三五、九	五七、五	一六、九
同十五年同	四〇、三	七二、七	二二、一

又各地よりの電報の左の如し

長崎三十日午後七時

晴雨計 三〇、〇七英寸 寒暖計 六二度

風力 二三英里 方位 南

晴雨計最低ハ午後七時

和歌山三十日午後六時

晴雨計 三〇、二〇英寸 寒暖計 六〇度

風力 一三英里 方位 南南西

晴雨計ハ沈降中

同所三十一日午前六時

晴雨計 二九、九九英寸

風力 二四英里

晴雨計最低ハ午前七時

寒暖計 六四度
方位 南南西

新潟三十一日午前九時

晴雨計 二九、八六英寸

風力 三七英里

晴雨計最低ハ午前六時

寒暖計 五四度
方位 西南西

青森三十一日午後七時

晴雨計 二九、九九英寸

風力 二八英里

晴雨計最低ハ午前九時

寒暖計 三六度
方位 西

函館三十一日午前十時

晴雨計 二九、七五英寸

風力 一二英里

晴雨計ハ沈降中

寒暖計 三五度
方位 北
(以上地理局報告)

○我邦人の飲食に供する品物其數尠かり然れとも其成分及び滋養分の多少等に至りてハ此れを知るもの甚だ稀かり然るに左の分析表の日用飲食に供する品物を聚めて學士磯野君が自らこれと分析し或ハ他人の手に成りし

ものも信據をべき分を集められざるものありとて寄送せられれば掲げて以て讀者諸君の電覽に供すと云ふ

同	本日 糯 <small>モチ</small>	同	米 粳	同	本日 粳 <small>ウルチ</small>	
一一、〇一	一四、〇〇	、、、、	、、、、	一一、二八	一三、六三	水分
一、四五	一、一四	、、、、	、、、、	一、二二	一、二八	灰
三、三〇	二、三六	〇、二五	〇、一三	一、四三	二、一五	脂肪
五、一三	六、〇七	三、六〇	三、六〇	六、一三	五、八〇	蛋白質
四、九一	四、六〇	四、八〇	四、八〇	五、二九	四、〇〇	纖維
七三、二〇	七二、七〇	八四、一五	八六、〇七	七四、六〇	七三、一四	澱粉
、、、、	〇、一三	、、、、	、、、、	〇、一五	、、、、	糖分膠質